



TITLE:

# ユルスナールにおける「共感」：文明論的観点から

AUTHOR(S):

久保田, 亮

---

CITATION:

久保田, 亮. ユルスナールにおける「共感」：文明論的観点から. 仏文研究 2004, 35: 137-150

ISSUE DATE:

2004-09-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/137952>

RIGHT:

# ユルスナールにおける「共感」

## ——文明論的観点から——

久 保 田 亮

### 1 序

マルグリット・ユルスナールという作家の名を聞く時、我々がまず始めに思い浮かべるのは、ヨーロッパの文化的保守性に裏打ちされた伝統的作家の姿であろう。彼女の小説作品、エッセイを眺めても、そこに20世紀の現代を生きる我々の等身大の生活を見ることは稀であるし、その自伝的な作品群 *Le Labyrinthe du monde*<sup>1)</sup> においてさえ、我々の日常の生活感覚とは甚だしい乖離を見せている。概して、回想という形式での自己省察と幼児期の記憶への沈潜があるばかりなのである。しかし、ユルスナールの歴史小説と呼ばれるジャンルに属する作品の主人公たち（ハドリアヌス帝やゼノンなど）は、20世紀の諸問題を生きる現代人の心性に通ずるものを有していることは確かであろう。ハドリアヌス帝における帝国の多様性と統一に対する思索。ゼノンにおける世界の普遍性という世界認識。インド学者のシルヴァン・レヴィは「地球が丸くなって以来、西方も東方も意味をなさない<sup>2)</sup>」と述べるが、ゼノンが東洋に関して共有する感覚もまたそのようなものだ。東方への旅と東方の王宮での経験を経て、彼が至るのは世界における人間の愚行は普遍的であること、したがって、「東洋の神話」などは存在しないことの確信である。このような意味において、これらの登場人物たちの世界観、あるいは人間存在に対する問題意識は現代性を帯びてはいる。神話や神秘は主人公たちの冷静、普遍的な思考のもとに置かれるからである。しかし、それでは、彼らは我々にはまったくの現代人と見えるだろうか。むしろこう言うべきではないだろうか。彼らの中の「現代的」に見える部分は、現代にのみ固有のものではなく、時代の変遷に無関係の一種の超時代性に属するのではないだろうか。

それでは、ユルスナールは時代を超越したヨーロッパの文化的保守性の体现者のような存在なのだろうか。彼女の超時代性は伝統と保守性に集約されるのだろうか。この問いに関しても、ある意味ではOuiだが、またある意味では、Nonであると答えなくてはならない。ユルスナールという作家ほど「定義」を逃れる、あるいは、逃れようとしている作家もめずらしいように思える。この作家が容易に「定義」を受け付けないことを、Jean d'Ormessonは、ユルスナールのアカデミー会員選出の演説の際に次のように表現している。

Marguerite Yourcenar reste une espèce de mystère extrêmement célèbre, une sorte d'obscurité

lumineuse. [...] Vous êtes Madame, un mythe et un enjeu autour desquels, depuis des mois, beaucoup se sont battus qui vous avaient à peine lue.<sup>31)</sup>

ユルスナールが時に見せる文明嫌いは注目に値する特色であろう。メーン州でのユルスナールの隠遁生活と、いわば彼女の進んで求められた無名性はヨーロッパの読者にとっても長年、一つの *mystère* であったのだ。文明や知識の中にありながら、彼女がそれらに対して批判的あるいは懐疑的であるとき、彼女の中には如何なる意識があったのだろうか。修士論文と『仏文研究』34号の発表記事を通じて、筆者は『東方奇譚』所収の「老絵師の行方」および同作品と他の作品 (*Le Temps, ce grand sculpteur, Le Conte bleu, Les Songes et les Sorts* など) との関係性に触れた。これまでは議論の中心はむしろ作品の技法に関してであったが、その過程で出会ったのが、「共感」という概念であった。ユルスナール自身はこれに関して、*participation, compassion, sympathie* などさまざまな表現を使用しているが、そこには一定したユルスナールの思想が存在するように思えた。これらの言葉によって、ユルスナールが我々に提示するのは、概念ではなく、現実との接触 (*contact*) を通じてなされる、認識主体と対象を分化しない、自己同一化的認識の方法である。本稿ではこの「共感」のキーワードに沿って議論を進めていきたい。こうした問題に対する回答には、さらに広範な研究とさらに多くの紙面が割かれることが必要とは思われるものの、そのための第一歩として、この問題に関しての若干の考察を試みたい。

## 2 ユルスナールにおける文明批判

ユルスナールの文明観は、自身も偶然の連続であったと述べているとおり、その複雑な人生経路を反映して、特色的なものになっている。ユルスナールはヨーロッパを活動の中心に据える大陸作家やとりわけパリを中心にして形成される多くのフランス人作家たちとは大いに異なり、アメリカに居を定めた。事実彼女のヨーロッパ時代とアメリカ時代を比較すると、後者のほうが長いのだ。1939年、ヨーロッパを離れると、はじめは短期の滞在を予定していたが、そのままアメリカに定住することになる。これより以前、1929年に«Diagnostic de l'Europe», 1938年に『東方奇譚』を描き、異国への憧憬とヨーロッパ文明への悲観論を展開している。アメリカ滞在はヨーロッパとの物理的な別離を決定づけたとも言える。しかしながら、アメリカもユルスナールにとっての理想の楽園では決してなかった。地元のコミュニティーカレッジ、サラ・ローレンス・カレッジにて1942年から1949年の間、フランス語と比較文学の教壇に立つ一方で、彼女のアメリカ社会への適応ははかばかしくはなかった。ローマ・ギリシャ文明に源を発するヨーロッパの人文主義の残る当時の彼女にとって、アメリカ社会は全くの異国であった。消費生活の氾濫、恒久的信念の欠如、永続的価値への無理解。そして、ますます広がりゆく自己のヨーロッパ文明との距離。ユルスナール自身は大戦前後のニューヨークで亡命フランス人作家たちと会った<sup>32)</sup>としているが、ユルスナールが自己申告するほどは人的交流は広くなかったらしい。英語には堪能であ

りながら、フランス語の使用をあくまでも堅持しようとしたユルスナールが広い人的交流をアメリカ社会のなかに得ようとしなかったこともあり、この間、彼女の精神的孤立はますます深まっていったと考えられる。しかし、こうした状況、文明の中の未開の孤独は、ユルスナールにも3つのものを与えた。

- 1) 蔵書の再読の機会。読書を通じての自己の文化への精神的回帰がなされたこと。
- 2) 自然観照。アメリカ大陸の広大な自然の中で、自然との対峙を余儀なくされたこと。
- 3) 文化的隔離状態での自己省察がなされたこと。

こうした雌伏を経て、自らユルスナールの作家としての進路は形成されていったように思える。この間、大陸での大戦を免れた『ハドリアヌス帝の回想』の草稿がローザンヌよりアメリカへと届けられると、ユルスナールは再びかつての大作の構想に戻っていく。実際、ユルスナールの二大傑作『ハドリアヌス帝の回想』、『黒の過程』が生み出されたのはアメリカの土地だったのだ。ユルスナールの文明観なり、また彼女においてその問題に緊密に関係すると思われる自然観なりを考える時、この時期の彼女のアメリカでの自然との対峙の経験あるいは自己省察の経験は不可欠であるように思われるのだ。アメリカ社会において、彼女が直に経験した「文明的な孤独」がユルスナールの文明観形成の重要な要因になっている。こうした状況をふまえつつ、ユルスナール自身の具体的な言葉に沿ってみたい。

1972年、このころにはユルスナールはメイン州に定着し、安定を得ている時期であるが、この年に『フィガロ』誌上に発表されたエッセイの中で、ユルスナールは文明批評として次のように述べている。

Il est arrivé aussi à beaucoup d'entre nous de passer vite, éccœurés, dans quelque petite ville d'Espagne ou d'Orient, devant la boucherie locale, avec ses mouches, ses carcasses encore chaudes, ses bêtes vivantes attachées et tremblantes en face des bêtes mortes, et le sang s'écoulant dans le ruisseau de la rue. Notre civilisation à nous est à cloisons étanches : elle nous protège de tels spectacles.<sup>5)</sup>

ユルスナールは高度に文明化された現代社会の問題性を指摘する。生き物の血や死から完全に隔離され、人は無菌室的な環境の中に保護されているとする。さらに、ユルスナールが主張するのは、そうした無菌室的環境のなかに生きることがもたらす問題である。

Oscar Wilde a écrit quelque part que le pire crime était le manque d'imagination : l'être humain ne compatit pas aux maux dont il n'a pas l'expérience directe ou auxquels il n'a pas lui-même assisté. J'ai souvent pensé que les wagons plombés et les murs bien construits des camps de concentration ont assuré l'extension et la durée de crimes contre l'humanité qui auraient cessé plus vite s'ils avaient eu

lieu en plein air et sous les yeux de tous. L'habitude, sur les places publiques du Moyen Âge et du Grand Siècle, mithridatisait assurément certains spectateurs ; il s'en trouvait toujours, pourtant, pour s'émouvoir, sinon protester tout haut, et leur murmure a fini par être entendu. Les exécuteurs des hautes œuvres de nos jours prennent mieux leurs précautions.<sup>6)</sup>

ここでもユルスナールは、ミッシェル・フーコーを思わせる語り口で、いわば逆説的真理を述べている。ユルスナールの批判の対象は、強制収容所の残酷さや冷血さそのものにあるのではなく、むしろ、それらの事柄に目を向けないまま、あるいは、それらを感知しないままに、大きな犯罪に加担してしまうのを許す現代人の意識であり、無意識のままに彼らに関与させてしまう社会システムの問題性にある。その弊害をユルスナールはオスカー・ワイルドの言葉を引用しつつ、「想像力の欠如」と表現する。自己が直接的に経験したことあるいは自己が直接に参与した事柄でなければ、対象に対する「想像力」は生じないが、この意味では、オリエントやスペインの小都市の肉屋の前で繰り広げられる陰惨な光景、したたる血、他のものの死に恐れおののく動物たちなど、こうした場面を目にすることのない現代人はあきらかに直接経験と他の存在から感受する想像の機会を奪われているといえる。ユルスナールが述べるのは、そうした想像力、言うならば、「共感」の作用がより大きな犯罪への抑止力として働いていないことが遠因となる現代の危機と言えよう。

ここでの重要な点は、「つながり」ということであろう。ユルスナールは想像力が各存在を結ぶ、そうした「つながり」を想定している。ユルスナールが我々は「隔離された状態にある」(«Notre civilisation à nous est à cloisons étanches»)と言う時、存在の隔離とは個体間のつながりの欠如を、また、それらを結びつける共有された想像力(「共感」)の欠如を意味しているように思われる。

それでは、この「つながり」についてさらにくわしくみていく。次の一節は「儀式」の効用に対するユルスナールのインタビューでの発言である。

J'aime la mystique qui se dégage des cérémonies quand elles sont belles, quand elles ne sont pas gâtées pour une raison quelconque. [...] Mais ce qui m'émeut dans les cérémonies, c'est un certain effort de participation, à un niveau auquel tout le monde peut atteindre, ce qui est important, parce que cela n'arrive pour ainsi dire jamais dans le domaine de l'intelligence ; les gens interprètent les concepts, chacun à sa façon. Les cérémonies (ou les fêtes, c'est un peu la même chose), dans lesquelles les êtres se sentent solidaires, c'est beau, comme une forme de vie plus fervente. A moins, bien entendu, qu'on ne retombe au niveau très bas d'un chauvinisme de foule, qu'il soit catholique, communiste, fasciste, raciste, peu importe, où la ferveur fait vite place à l'arrogance et à la haine.<sup>7)</sup>

ここでは、cérémonieが人に連帯感をもたらすこと、つまり、「共感」がもたらす儀式の意義が述べられている。しかし、このなかで我々がいまひとつ注目すべきは、「共感」-「知性」の対立

的シェーマである。「共感」(participation)は知性の達し得ないものに達し得るという点において、両者は根本的に地平を異にする。それでは、なぜ異なるのか。知性とは現実そのものでなく、現実の概念を扱うものであり、その概念判断は個々人で行われるため、見方、立場は様々なものとなるが、一方、「共感」は万人が達しえるものであり、それにより、そのとき、その場所にいる全員に連帯感をもたらすものである。知性は各人間に差異をもたらすが、「共感」は各人を一体化させるのである。ここで我々が会うのもまた「つながり」という見方だ。我々は一人の人間でありながら、被選挙人、納税者、被告など、判断の基準が複数であるために、人々は複数の虚構に沿って行動しなくてはならなくなっている、とヴァレリーは現代人の精神の内的混乱状況を指摘した<sup>81)</sup>。ユルスナールがはたして立場をおなじくしていたかはわからない。しかし、もっともそれが低俗なショービニズムに堕さないという条件の下にはあるが、ユルスナールは熱烈な生の一形態としての儀式的働きを一面において重んじていることがわかる。ユルスナールが、儀式に見るのは、「知性」ではなしえない、自－他の間で醸し出される連帯の価値なのである。

以下では、具体的な小説作品のなかで、「共感」の概念がいかに現れているかみていく。

### 3 ユルスナールの小説作品における「共感」

#### 3-A)『ハドリアヌス帝の回想』より：ハドリアヌス帝の自己省察における「共感」

『ハドリアヌス帝の回想』はユルスナールに1952年にフェミナ賞をもたらし、彼女の最高傑作の1つに数えられるが、その完成までの道のりには非常に長い時間がかけられている。1924年から1926年の間にすでに構想され、はじめ対話形式で書かれていたこの作品は、Antinoosの題名でFasquelleに出版を申し入れるが、実現に至らず、草稿は作者自身の手によって破棄された。しかしながら、ユルスナールのアメリカ移住後に転機はおとずれる。アメリカの大学付属図書館でのハドリアヌス帝関連資料研究とその間の醸成を経て、1951年ようやく日の目を見ることとなる。『ハドリアヌス帝の回想』は歴史小説のカテゴリーに分類されるが、それに特色を求めるならば、同作品が「1人称」によって書かれている点ではないだろうか。この点に関して言うなら、『ハドリアヌス帝の回想』は3人称の語り手をもつ従来の形の多くの歴史小説とは大きく特色を異にしている。しかし、ここで注意しておかなくてはならないのは、ユルスナールの意は、客観的な歴史的事実を積み上げるのみでなく、ハドリアヌス帝の内面にいわば同化を試みる努力にも注がれたことである。ユルスナールは『ハドリアヌス帝の回想』のカルネの中で、これを「交感の魔術」<sup>91)</sup>と呼んでいるが、ローマ皇帝の再現に当たってはこの方面で多大な努力が払われた。ギリシャ語の書物に囲まれ、ギリシャ語で書くことさえ行っている。周囲の環境を徹底的に作り上げることで、ローマ皇帝の内面に文字通り「1人称」的な没入を試みたのであり、こうしたアプローチがすでに「共感」という考え方を含んでいたようにすら思える。

自己との同化によって作り出されたハドリアヌス帝において「共感」とはいかなるものであったのだろうか。次の一節は、ハドリアヌス帝自身が、若き日の乗馬体験に始まり、「共感」の体

駿について述べる部分である。

Mon aide de camps Céler l'exerce [= cheval] en ce moment sur la route de Préneſte ; toutes mes expériences passées avec la vitesse me permettent de partager le plaisir du chevalier et celui de la bête, d'évaluer les sensations de l'homme lancé à fond de train par un jour de soleil et de vent. Quand Céler saute de cheval, je reprends avec lui contact avec le sol. Il en va de même de la nage : j'y ai renoncé, mais je participe encore au délice du nageur caressé par l'eau. Courir, même sur le plus bref des parcours, me serait aussi impossible qu'à une statue, un César de pierre, mais je me souviens de mes courses d'enfant sur les collines sèches de l'Espagne, du jeu joué avec soi-même où l'on va jusqu'aux limites de l'essoufflement, sûr que le cœur parfait, les poumons intacts rétabliront l'équilibre ; et j'ai du moindre athlète s'entraînant à la course au long stade une entente que l'intelligence seule ne me donnerait pas. Ainsi, de chaque art pratiqué en son temps, je tire une connaissance qui me dédomage en partie des plaisirs perdus. J'ai cru, et dans mes bons moments, je crois encore, qu'il serait possible de partager de la sorte l'existence de tous, et cette sympathie serait l'une des espèces les moins révocables de l'immoralité.<sup>10)</sup>

この引用の中で、ユルスナールが挙げているのは、風と日の光の中をギャロップで走る騎手、水の流れに愛撫される泳者、競技場を走るアスリートなど、いずれも身体による運動である。不治の病を患い、死期が間近であることを悟った老皇帝にとっていずれも縁遠いように思える問題ばかりである。これらの事柄は、血気盛んだった若き日の回想にすぎないのだろうか。一般的な意味で、回想が純粹に意識上の営為だとするなら、ハドリアヌス帝の語るこれらの事象はやや異なっている。興味深いのは、partagerやparticiperといった語を用いていることだ。ここには他者となにかを共有するというニュアンスが含まれていて、「共感」する主体はplaisirやdéliceという身体感覚ないしは感覚を共有する。しかし、ここで重要なのはその方法であろう。知性は自己を他者と分離することから始まり認識に至るが、一方で、ハドリアヌス帝の用いる認識の方法は両者の距離を置かない、contactのようなものに発する。知性の場合、両者の距離は隔てられたままであり、必然的に自己の判断という、他者の存在とは相容れない強い自己意識の残存があることになるのに対し、これは自己と他者が一になる形で、つまり、自己を他者の位置に置き、対象との同化を行うことで可能になる認識の方法である。ここで示されるのは、客観化や相対化という知性の働きとは別次元の理解なのである。それ故、ユルスナールはハドリアヌス帝にこう言わせている。「私はどんなアスリートからも、知性のみが私に与えたことがないような一つの理解を得るのである」と。「共感」という理解の形式が一人の生の中で、複数の他者の生を繰り返し生きていることを可能にしている。ここで言う、「共感」が一種の不死性であるというのはそうした意味においてである。

このようなハドリアヌス帝の言葉（というのはユルスナール自身の言葉にほかならないのであるが）を聞く時、我々の脳裏に浮かぶは、知性は個体間に銘々の概念解釈をもたらすが、儀式は

如何なる個体差も存在しないようなレベルで人々をその「共感」の効果によって一つに連帯させるという、儀式に関しての知性と「共感」の対立的シェーマであろう。事実、作品中にも、ハドリアヌス帝はローマ帝国の正統としてのギリシャ哲学を修めた碩学であると同時に東方起源の神秘主義（ミトラ信仰）の愛好家の側面も併せ持った人物として描かれている。ユルスナールはハドリアヌス帝に儀式性への嗜好と情念，感覚的側面とを与えていたのだと言えよう。そして、また、これらの性質こそが彼の軍人－政治家としての現実的，実践的側面を保証するものともなっているのだ。

Ces fantassins daces que j'écrassais sous les savots de mon cheval, ces cavaliers sarmates abattus plus tard dans des corps à corps où nos montures cabrées se mordaient au poitrail, je les frappais d'autant plus aisément que je m'identifiais à eux. [...]

Un certain nombre d'actions d'éclat, que l'on n'eût peut-être pas remarquées de la part d'un simple soldat, m'acquiescent une réputation à Rome et une espèce de gloire à l'armée. La plupart de mes prétendues prouesses n'étaient d'ailleurs que bravades inutiles ; j'y découvre aujourd'hui, avec quelque honte, mêlée à l'exaltation presque sacrée dont je parlais tout à l'heure, ma basse envie de plaire à tout prix et d'attirer l'attention sur moi. <sup>11)</sup>

この人物は対象としての事物を自己から離れたのものではなく、常に、自己の側に引き寄せて見ているのであり、ユルスナールがこのストア派の哲人政治家に与えているのは、現実との接点をもたらす「共感」という事物の認識方法なのである。

オズワルド・シュペングラーは『西洋の没落』を1918年に著し、大戦を反映した当時の社会的風潮とも相まって、彼の悲観的文明没落論はヨーロッパ社会全体に大きな議論と影響をもたらした。1929年、「Diagnostic de l'Europe」を発表したユルスナールも、彼女自身も認めているヴァレリーの『精神の危機』の影響とともに、当時の社会の雰囲気とは無関係ではあり得なかったであろう。そのシュペングラーは反知性主義を展開する上で、政治（実践）と哲学（思弁）の伝統的断絶を述べ、反知性主義的な言論を展開している。

なぜなら、行為者、すなわち、運命の人間だけが結局のところ、現実の世界に生活するからである。これは政治的な、戦闘的な、また経済的な決断の世界であり、そこでは概念や体系は数に入らないのである。そこでは巧みな斬り込みは巧みな結論よりも価値がある。[……] 感覚から離れた理解は人生の一面にすぎないで、しかも決定的側面ではない。西洋思想史ではナポレオンの名はなくてもいいかもしれない。しかし、現実の世界ではアルキメデスはそのすべての科学的発見をもってしても、かのシュラクサイの攻撃で彼を打ち殺した兵士よりも活動的でなかったのである。[……] 政治家が自分のしていることを「知ら」ないのはしばしばだ。しかもこのことは彼が確実に成功を収めることを妨げない。政治的空論はなにがなされなくてはならないかを知っているそれにもかかわらず彼の活動は、ひとたび紙の上以外に出る時には、歴史上もっとも不成功で、したがって



最も価値のないものとなるのである。[……] プラトンとルソーと（群小の思想家は全く別として）が抽象的国家組織を組み立てたとしても－それはアレキサンドロス、スキピオ、カエサル、ナポレオン、また彼らの計画、戦争、命令にとってはまったく無意味である。思想家達が運命について語るなら、語ってもいい。軍人、政治家にとっては運命であることで十分なのである。<sup>12)</sup>

ユルスナールのなかにシュペングラーの影響を直ちに见ようとするのは適当とは思われないし、事実、著者自身もそうするつもりはない。そうではなく、むしろ、ここで注目すべきなのは、シュペングラーの主張するような政治（実践）と哲学（思弁）のいかんともしがたい相克と分断が指摘されるという状況の中で、ユルスナールが西洋文明の淵源としてのローマ時代に材を求め、政治と哲学を併有した人物を現代に再構成したという事実である。ユルスナールが作り出そうとしていたのは、知性と実践が未だ分離しておらず、それ故、哲学が人間のありのままの生に発揮されていた始源に近い人間ではなかっただろうか。そうした *homme d'action* を想像する際に、対象との異化作用を促す知性の働きを補完するものとして、つまり、彼の哲学的側面を補うものとして、同化をもたらす「共感」の作用が重要となっているのである。

### 3－B）夢の入り口としての「共感」

我々が今まで見てきた「共感」は、他者との同化や感覚の共有という人と人との間の「共感」を問題としてきた。しかしながら、ユルスナールにおける「共感」はかならずしも人と人の間に限定されるわけではない、それは、時として、物と人との交感という超自然的な概念に拡大される場合すら見受けられる。さきにユルスナールのアメリカ生活を考える上での重要な要素として、「自然観照」をおいたのもそうした理由によるものである。

おなじく『ハドリアヌス帝の回想』の中から、先の引用につづく部分で、ユルスナールはそうした物との交感について述べている。

Il y eut des moments où cette compréhension s'efforça de dépasser l'humain, alla du nageur à la vague. Mais là, rien d'exacte ne me renseignant plus, j'entre dans le domaine des métamorphoses du songe.<sup>13)</sup>

これまでの「共感」と比較する時、ここでの「共感」には明らかに一つの飛躍が見て取れる。水の中を泳ぐ人間の感覚から、もちろん擬人法という意味ではなく、その泳者を包み込んでいる水そのものへと、つまり、ものへと一足飛びに向かっている点だ。いわば、人は水そのものとなるのだ。しかし、この場合には、同化する対象との間に共有される人間的な意味での感覚は喪失してしまっている。そこに残るのは、自己の想像力のみであろう。確実なものは何一つない夢の領域。メタモルフォーズの領域。「共感」の作用が人間という境界を越える時、こうして夢への道が開かれているのだ。

ユルスナールにおいて夢とは文学のひとつの方法であった。彼女は人間の意識への潜沈とい

う言葉をしばしば使用するが、ユルスナールは自己の意識の深部を探るという方法で、文学のインスピレーションと題材を自己の内奥に求めた作家の一人であった。ゼノン、ハドリアヌス帝の思索は言うに及ばず、1938年の*Les Songes et les Sorts*は、ユルスナール本人の夢の記録であり、*Les Songes et les Sorts*の夢は、『黒の過程』の主人公ゼノンの夢の記述にも応用された<sup>14)</sup>。同年に『東方奇譚』の名称で出版された短編小説群と「青の物語」はその夢のひとつの発露であった。時として、ユルスナールは回想と記憶を文学の源泉とする作家とみなされることがある。もちろん、これらの傾向の作家は、その方法と内容において、様々であるため、一様に論ずることは難しいが、こうした印象が必ずしも外的外れというわけでもない。というのも、事実、ユルスナールにはより深部での人間の精神生活を探求しようという嗜好とともに、そのためのかなり恣意的な努力が見出されるからである。そうした意志は彼女を、時に、ダンテの『新生』に、アルブレヒト・デューラーの夢に、そして、アレクサンドラ・デヴィッド＝ニールの*Mystiques et Magiciens du Tibet*にも向かわせた。かなり広範に渡る研究と思索がなされたようである。ユルスナールの精神探求への関心を概略的に見るなら、3つの傾向が見られる。

- 1) 西洋神秘主義、錬金術思想およびユング心理学
- 2) 夢、眠りおよび無意識（ダヴィンチ、デューラー、ダンテ等）<sup>15)</sup>
- 3) 東洋思想（仏教、道教、禅哲学等）<sup>16)</sup>

それらのテーマはユルスナール本人の連想と思索によって縦横に連携している。『黒の過程』を例に取るなら、主人公のゼノンの思索の場面には、西洋の錬金術思想が下敷きとして使われているが、自己の身体を一つの王国、一つの世界に比するヴィジョンの中には、ユルスナール本人も述べるとおり、チベット仏教の瞑想が参照されている。このように、一つの作品、登場人物をとっても、そこには、実に様々な思想の影響と思索が混在しているために、学問的に整合的なアプローチが必ずしも可能なわけではない。むしろ、それは独立し、閉じられた一つの世界であると考えべきだろう。多様な思想、宗教観と自己内部への深い観察が織りなす構造が、ユルスナールの深く内省的な文学世界の基盤をなしているのだといえよう。

「共感」と「夢」の関係を考える時、我々は1920～1930年代のユルスナールの初期作品にふたたび戻らなくてはならない。この時代は、「夢」とユルスナールの「幻想的オリエンタリズム」に非常に緊密な関係が見られた時代であった。東洋に題材を求めた短編小説集『東方奇譚』と作者自身の夢とそれを巡る思索の記録である*Les Songes et les Sorts*は、ともに1938年の出版となっているが、同年の出版というのは決して全くの偶然ではない。両者の間にはそれなりの因果関係が存在する。というのは、当時のユルスナールにとってオリエントとは自己の夢を表現し映し出す一つの舞台であり、『東方奇譚』は*Les Songes et les Sorts*の文学的表現であるからだ。この時代のユルスナールのオリエントは、作者の夢の産物である。1930年代に描かれた『青の物語』では、魔法と財宝に満ちたアラビアンナイト的なオリエントが、『東方奇譚』、とりわけ、「老絵師の行方」では、芸術的想像力が現実化される空想の中国がそれぞれ現れている。E・サ

イードはオリエンタリズムは一つの言説である、と述べた<sup>17)</sup>。ユルスナールにおいては、そのオリエンタ像には政治的な意味合いは皆無であるにしても、自己の空想の中から生じたものであるという点では、それは現実ではなく、言語の産物であった。異国という言葉はそれ自体曖昧なニュアンスの言葉である。というのは、異国と言う時、それがどういう性質のものか、あるいは、如何なる場所に位置するかというそれ自体の属性以上に、判断する我々とどう異なるかという相違のほうが強調されてくるからである。その結果、異国のイメージは、それを眺める「我々」の想像を反映して、きわめて曖昧なものとなり、ときには、その「我々」の自己自身が、異国のイメージの上にそのまま投影される。こうして、外部は内化される。外をながめるとき、人は実は自己の内側を眺めているのである。異国のイメージが理想や、また反対に過度の脅威を含むことがあるのはそのためなのである。

1920年から1930年代の若き日のユルスナールが作り出した東洋こそはまさにそうしたものであった。事実、そうした東洋は現実を反映したものではなかったし、ユルスナール本人にも東洋の現実を描こうという意図はなかった。そうした意味で、彼女は徹底した読書家であった。そのために、オリエンタは自己の内面の反映、自己の想像力と理想論の発露としての役割を担ったのだ。当時の彼女のそうしたオリエンタ像の根本を形成するのは、ユルスナールの理想（おそらく当時のヨーロッパ文明には欠けていたと彼女が感じた理想）とユルスナールのヨーロッパ文明に対する悲観論という2つの要素であった。かくして、オリエンタは彼女の思想を文学的に表現する場となったのだ。

『東方奇譚』という作品はまさにそのヨーロッパへの悲観論と彼女自身の理想が夢想と交差する場であった。以下はその『東方奇譚』のなかでも、とりわけ、重要と思われる「老絵師の行方」の一節である。

Wang commença par teinter de rose le bout de l'aile d'un nuage posé sur une montagne. Puis il ajouta à la surface de la mer de petites rides qui ne faisaient que rendre plus profond le sentiment de sa sérénité. Le pavement de jade devenait singulièrement humide, mais Wang-Fô, absorbé dans sa peinture, ne s'apercevait pas qu'il travaillait assis dans l'eau.<sup>18)</sup>

処刑をまえに、若き日の未完の山水画の完成を皇帝に命ぜられたワンフーが、絵の作業に取りかかる場面である。これに関するより詳しい説明は前回『仏文研究』34号の記事に譲るとして<sup>19)</sup>、老絵師が自らの絵の大海の水と合一するこの場面は、同作品の幻想性（絵と現実世界の交差）を表現する上で重要な場面であり、同時に、主人公の芸術的開悟の瞬間を象徴的に表現した場面でもある。

海の水の静かなさざ波と深まりゆく精神の静けさ。水と人間の交感のなかで、この彼の芸術の完成は遂げられている。ユルスナール自身、中国のmysticismeに関する多くの書を読んでいたらしいことが彼女の書誌からわかるので、「天人合一」の概念を感じ取っていたのか。しかし、そのあたりは定かではない。いずれにせよ、ここで見られるのは、彼我の境界を越えた「共感」の

作用であろう。

感覚が水という自然の事物のなかにとけ込んでいくかのように、人が水と合一するこの場面を見る時、我々はハドリアヌス帝の「泳者から波に至る（«du nageur à la vague»）」という言葉想起するのではないだろうか。ハドリアヌス帝はこれに続けて、「夢のメタモルフォーズの領域に入る」と言っている。このハドリアヌス帝における場合には、こうした一連の記述はあくまで回想であり、思索である。それらは自己の意識のなかの出来事でしかないのだ。しかし、「老絵師の行方」の幻想の東洋はそうではない。ユルスナールの東洋（あるいは言説の東洋といってもよい）では、夢は現実と等価の価値を持ち得るものであり、ワンフーの芸術的想像力によって、「夢のメタモルフォーズ」が現実世界に展開され、しかも、その超自然的な力が皇帝の地上的権力を圧倒するところに、この東洋の物語の、あるいはさらに正確に言うなら、東洋に仮託されたこの物語の幻想性と作者の実現し得ぬ理想が存しているのだと言えよう。

このようにしてみると、我々は結局、人から物への「共感」とそこに開かれる「夢」への道という当初の問題へとたどり着くことになる。しかし、ここで注意しなくてはならないのは、こうした一連の問題が、「東洋」と「夢」の関係の中で、「幻想のオリент」という文脈の中で語られていることであろう。そこには何らかの関係性があるのだろうか。

ユルスナールの精神探求の努力の中で、東洋思想がかなり多くのウェイトを占めていたこと<sup>20)</sup>、しかも、そこにはかなり組織的な研究の跡があることはすでに述べた。そうした事実の一端をユルスナールの書誌は物語っている。この中で、ユルスナールは近代西洋において希薄となった、人間存在の根底に位置するような精神の様態を、進んで異文化のなかに、なかんづく、東洋のなかに求めようとしていたらしいのだ。つぎのようなユルスナールの言葉は彼女のそうした傾向を端的に示している。

La pensée orientale propose un certain nombre de notions et d'exercices qui permettent d'entrer dans la nature des choses, d'éliminer l'insignifiant. Par la méditation, la concentration. Le disciple s'assied devant un arbre, regarde l'arbre et se dit : je suis un arbre. Il passe du côté de l'arbre et puis de nouveau du côté humain en essayant de comprendre ce qu'il représente pour cet arbre. Il y a là une culture mentale en dehors de la pensée religieuse, à laquelle l'Europe a renoncé de très bonne heure, d'une part parce que la pensée grecque est devenue extrêmement intellectualisée et politisée, et d'autre part parce que le judaïsme et le christianisme ont été trop dogmatiques.<sup>21)</sup>

ユルスナールはギリシャ思想が極端に知識化、政治化され、キリスト教が教義的であるとする。そうした西洋思想の枠外にある思想を進んで求めた過程に東洋との出会いがあったのではないだろうか。ユルスナールがそこに求めるのは、「宗教」という人為的なカテゴリーでは括れない、culture mentale（精神文化）、過度に知性化されていない心が、「共感」によって、自由に自然物の本質に達し得るようなそうした始源的な精神のあり方であったのだろう。

## 結 論

現実のユルスナールの置かれた状況の勘案あるいはこれらのユルスナールの具体的発言から取り出せる当面の仮定は次のようなものである。つまり、ユルスナールは、「文明」や「知性」といった近代の形成にとっての根本概念ともなる優勢的価値観に対して、「共感」を失われた価値、あるいは、対立的価値として対置させ、事物あるいは他者とのコンタクトを通じて生じる「共有」の感性の価値を、おそらく「知性」のそれと同程度に重視しているということである。これらの言葉を通じて理解できるのは、ユルスナールが、いわゆる保守的作家であるとか、文化に根ざした伝統作家というような単純なカテゴリー分類が不可能であることをしめす一面を持っているということだろう。古典の素養、該博な知識にもかかわらず、我々はそこに、きわめて大雑把な言い方ではあるが、反文明的とも、反知性的とも言えるような、またときには始源回帰の願望ともとれるような要素を見出すからである。

日常の何気ない会話や身の回りのありふれた事柄の中に、時として、その人の深い信念や真実の主張が潜んでいることを我々は知っている。日常に虚飾はないからである。筆者はこうした意味で、ユルスナールが、そのニューイングランドの自宅での生活について語った次のような言葉に興味を覚えた。

Accomplir les différentes tâches de la maison et du jardin auxquelles j'attache beaucoup d'importance. C'est un contact avec les choses. Je suis sûre que des certains d'écrivains français auraient été beaucoup plus grands s'ils avaient balayé leur chambre. Ils auraient su ce que c'est que la poussière. Et enfin maintenir le contact avec les choses.<sup>22)</sup>

ユルスナールがその作品とエッセイの中で繰り返し述べている、現実とのコンタクトと「共感」についてこうして見てきた後では、この言葉は一層の深い響きを持つのではないだろうか。

最後に、現実との接触および「共感」という概念から考えられる展望について述べておきたい。これらの要素は、ユルスナールの東洋への関心と相まって、2つの方向性を示している。一つ目は、その現実的行動と文学的表現が限りなくひとつに近い三島由紀夫へのユルスナールの関心（『三島由紀夫、あるいは虚空のヴィジョン』）であり、二つ目は、自らの理知的判断というものがまったく希薄であり、世界の状況に応じ、無名のうちに生まれ、無名のうちに死んでいく感性の人、『無名の男』の主人公ナサニエルという登場人物である。いずれもユルスナールの晩年の作であり、そこには、ユルスナール自身の思索とともに、その東洋研究の到達点があるように思える。こうした命題を考える上でも、「共感」の概念は大きな示唆も与えてくれるもののなのだ。

Abréviation  
des Œuvres de Marguerite Yourcenar

CWS : «Comment Wang-Fô fut sauvé» in NO

MH : *Mémoires d'Hadrien* suivi de *Carnets de notes de Mémoires d'Hadrien*, Gallimard, «Folio», 1998

NO : *Nouvelles orientales*, Gallimard, «L'imaginaire», 2001

ON : *L'Œuvre au Noir* suivi de *Carnets de notes de L'Œuvre au Noir*, Gallimard, «Folio», 1998

TGS : *Le Temps, ce grand sculpteur*, Gallimard, «Folio essais», 1991

YO : *Les yeux ouverts- Entretiens avec Matthieu Galey*, Bayard Edition, 1997

PV : *Portrait d'une voix*, Gallimard, 2002

注

- 1) 具体的には, *Souvenirs pieux* (1974年), *Archive du nord* (1977年), *Quoi ? L'Eternité* (1988年) の三作品を指す。三作目に当たる *Quoi ? L'Eternité* はユルスナールの死後の出版となる。いずれにおいても, 幼児期, 父親, あるいは, 血族の記憶が語られる。とりわけ, ユルスナールの文学と父親ミッシェル・クレヤンクールの関係は興味深い。
- 2) «les études orientales, leurs leçons, leurs résultats» in *Mémorial Sylvain Lévi*, P. Hartmann, 1937, p. 86.
- 3) Discours de réception à l'Académie Française in Colette GAUDIN, *Marguerite Yourcenar à la surface du temps*, Edition Rodopi, 1994, p. 8.
- 4) ユルスナール本人がインタビューで語るところによると, アメリカでまず滞在することになったニューヨークで, プルトン, レヴィ=ストロース, ジュール・ロマンらに会ったとしている (YO, p.124. 参照)。また, 彼女がバリ陥落を知ったのは, アメリカの文化人類学者マリノフスキーの家においてであった。
- 5) TGS, p. 193.
- 6) TGS, p. 194.
- 7) YO, p. 40-41.
- 8) ヴァレリー, 「精神の危機」, 『ヴァレリー全集11』所収, 筑摩書房, 1974, p. 86.
- 9) «Un pied dans l'érudition, l'autre dans la magie, ou plus exactement, et sans métaphore, dans cette magie sympathique qui consiste à se transporter en pensée à l'intérieur de quelqu'un.» (MH, p. 330)
- 10) MH, p. 15.
- 11) MH, p. 64-65.
- 12) オズワルド・シュペングラー著, 村松正俊訳, 『西洋の没落－歴史の形態学の素描』第2巻, 五月書房, 1977, p. 21-22.
- 13) MH, p. 15-16.

- 14) YO, p. 107-108.
- 15) ユルスナールは夢、眠りといった精神現象の探求において、フロイト、ラカン、ユングなどの特定の分析家の既成理論に準拠することを拒んだ。いずれの理論もそれ自体結論でなく、いずれもがまだ不完全な部分を含んでいるというのがユルスナールの考えであった。こうした方面の関心については、自己の経験をより重視していた姿勢が窺える。
- 16) メーン州のユルスナールの住まいであった Petite Plaisance の個人蔵書の中には様々な東洋関係の書物が所蔵されていた。その数は莫大な数に上るので、ここでそのすべてを挙げることはできないが、その数例を挙げてみたい。  
(順不同。CIDMY(Centre International de Documentation Marguerite Yourcenar)の編集に準拠。便宜のため一部を省略した。)
- The Upanishade*, vol. 1-4, New York, Bonanza Books, 1949, 319p.
- Ryder, Arthur W. *The Bagavad-Gita*, Chicago, The University of Chicago Press, 1929, 139p.
- Eliade, Mircea, *Techniques du Yoga*, Paris, Gallimard, 1948, 267p.
- David-Neel, Alexandra, *Immoralité et Réincarnation - doctrines et pratiques - Chine, Tibet, Inde*, Paris, Librairie Plon, 1961, 171p.
- David-Neel, Alexandra, *Le Bouddhisme du Bouddha*, Paris, Librairie Plon, 1960, 317p.
- Suyuki, Daisetz, *Zen and Japanese Culture*, Princeton, Princeton University Press, 1971, 478p.
- Yamamoto, Tsunetomo. The “*Hagakure*” - *A code to the way of the Samurai*. Translated by Takao Mukoh. Tokyo, The Hokuseido Press, 1980, 182p.
- Granet, Marcel, *La Pensée chinoise*, Paris, La Renaissance du livre, 1934, 614p.
- Doctrine de Confucius ou les Quatre Livres de philosophie morale et politique de la Chine*, Paris, Librairie Garnier Frères, 487p.
- Maspero, Henri, *Le Taoïsme et les religions chinoises*, Paris, Gallimard, 1971, 660p.
- Musing of a Chinese Mystic. Selections from the philosophy of Chuang Tzu*, London, John Murray, 1927, 112p.
- 17) エドワード・サイード、『オリエンタリズム』, 平凡社, 1986, p. 13.
- 18) CWS, p. 24.
- 19) 久保田亮, 「マルグリット・ユルスナール『老陰師の行方』－色彩の表象と想像的東洋」, 『仏文研究』34号, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 2003, p. 97 - 113.
- 20) 自らにおける東洋の思想の系譜について、ユルスナール自身次のように語っている。「Au début, j'ai fait quelques petites études du côté de l'Extrême-Orient, et j'ai continué ensuite, toute ma vie. Le livre qui va bientôt paraître, un tout petit livre, *Mishima ou la vision du vide*, est un des résultats de cet enchaînement. Mais dans les *Nouvelles orientales*, qui datent de 1939, il y a déjà deux, trois contes orientaux qui viennent en somme de la même veine.» (PV, p. 302.) この言葉によると、ユルスナールの東洋研究は彼女の人生を通じて行われたことがわかる。そのウェイトの大きさから、Matthieu Galeyによるユルスナールのインタビュー *Les yeux ouverts* では、「東洋から政治へ」(«De l'Orient à la politique») という章すら単独で作られている。
- 21) PV, p. 283.
- 22) PV, p. 277.